

ミュージアムニュース

第7号

2014年10月31日発行

国立大学法人 電気通信大学 UECコミュニケーションミュージアム

* 歴史資料館創設の思い出

有山 正孝

* 戦後のGHQの5球スーパー 受信機生産命令

芳野 赴夫

* 思い出話(高柳健次郎先生と のご縁を中心に)(その2)

青山憲太郎

* トランジスタの売り込み時代 (その1)

時田 元昭

* 学術調査員紹介

中村 治彦

磯田 英弘

* 編集後記

歴史資料館創設の思い出

有山 正孝

1996年年初頭の事でした。

L棟の後ろにあった木造の旧無線通信実習室を取り壊す事になった際に、「中に様々な機器類が保管されているがどうしましょう」と



云う問い合わせがありました。行ってみると古い通信機や、本学創設後間もない頃に藤原鎮男先生が本邦初のMNRの実験のため作成されたと伝えられる電磁石などがガラクタの山に埋もれて“保管”されていました。これは捨ててしまえばそれっきり、むしろ活かして本学の歴史を語り、併せて技術の歴史を示す教育的な資料展示室を造れないかと考え、年度末に残った予算で丁度新築移転により空き家になった機械工学科の工作実習室跡に取りあえず運び入れました。

並行して学長の私的諮問機関として歴史資料館準備会を立ち上げ、同年3月26日に第一回の会合

を開き、展示の理念と組織の確立についての検討を開始しました。折から本学の創立80周年記念事業の企画が進行していたので、これと連携して先ず学内措置による歴史資料館の設置を目指す事としました。当時文部省が推進していた大学附置博物館の設置に向けて概算要求をする事も考えましたが、これは実現しませんでした。

また学内に残存している歴史的価値のある物品を提供していただくよう広く呼びかけ、さらに外部から然るべき物品を集める事も計画しました。

手許の記録では準備会は必要に応じてメンバーを加えつつ1996年度中に11回、1997年度中に6回開かれています。そうして1997年10月、電気通信大学創立80周年記念事業特別委員会の下に資料展示専門委員会が設置され、準備会は発展的に解消して公認の委員会となり、歴史資料館も正式に認知される事になりました。

歴史資料館の収蔵物は急速に増加してたちまち手狭になり、夏は暑く冬は寒い建物の中で兼務かOBの館員たちはその整理に嬉しい悲鳴を上げる状況でしたが、徐々に整備が進み、1997年秋の調布祭では仮開館して初めて公開、そして1998年11月2日、正式開館に到りました。

歴史資料館はさいわいその後も発展を続け、名称もUECコミュニケーションミュージアムと変わって今日に至った事は皆様ご承知の通りです。この間、多数の方々から多大のご協力を賜りました。一々お名前を挙げて御礼申し上げるべき処ですが、紙面の都合上それが叶わぬ事をお詫び申し上げます。

UECコミュニケーションミュージアムが今後も時代に即して発展を続け、永く電通大の教職員・学生諸氏のみならず広く社会の為に役立つことを願っています。(おわり)

戦後の GHQ の 5 球スーパー受信機 生産命令

芳野 赴夫

私は昭和 4 年 (1929) に生まれ、今年 85 歳。昭和 11 年学習院初等科に入学し一年後、支那事変が勃発、昭和 16 年には太平洋戦争が始まり、20 年 (1945) 8 月 15 日に終戦という、戦争に翻弄された子供時代を過ごした世代です。その頃の多くの若者は、この戦争を勝ち抜くために将来何を成すべきかを考え、多くの若者は軍人に、あるものは科学・技術者を目指して努力していました。私は、学習院に居た事も有り、同僚や先輩に多くの著名な無線関係や航空技術者が居て、当時からあった GRG (学習院ラジオグループ) を通じていろいろな手解きを受ける機会や、情報交換の機会に恵まれていました。

早い時期から、科学技術者を目指して、多くの実物に接する機会を得たことは真に幸運で、その中でも森村喬、大河内正陽氏らの先輩に多くの手ほどきを受けて開戦のため実現しなかったが 16 年にアマチュア無線の資格試験を受験できました。私自身は海軍航空技術畑に居た叔父や先輩たちの世話で、海軍の技術部門進学候補学生の資格試験に受かり、早速、夏休み等を利用して海軍航空廠でエンジンオーバーホールの実習の機会を与えられ、将来は海軍の航空機技術者を目指していました。19 年暮れより学徒動員の名目で、横須賀の海軍航空技術廠で次期艦戦の烈風開発班に配属され、終戦の日は松根湯オクタン価の調査で山形県鶴岡の羽黒山に出張して居ました。その時は旧制中等科 4 年で 16 歳でした。

昭和 21 年に入ると、進駐軍の将校宿舎として日本の邸宅の接收が始まり、我が家も半分接收さ

れて不便な生活を強いられる事になったが、このことは、多くの米軍将校や技術者の知り合いを作ることに成り、その中には第 1 騎兵隊の通信大隊長の Sanders 少佐がいて、後に大いに世話になることに成りました。

22 年になると、私自身が旧制高等科理科甲類の 2 年生になり、終戦で航空技術者の道は閉ざされ、自分の将来は電気通信技術者の道に進むことを決めた時期に、学習院の先輩から米軍の通信機保守を日本人技術者に委託する計画があるがやってみないかとの話が舞い込みました。その条件は、身元が確かで英語に困らないことであり、はじめは沖縄に行くとの事で敬遠したが、丁度連合軍司令部 (GHQ) の横浜受信所の保守で週二日のアルバイト勤務があると聞いて応募を決め、グランドハイツの第 1 騎兵隊の通信大隊司令部で Hammarlund BC-779 通信用受信機の取り扱いと英会話テストにパスして採用されました。英語は、アマチュア無線の傍受と学習院が戦時中も英語教育を強化し旧制高校も週 5 時間の英語の授業があったのが役立ちました。

23 年 11 月、日比谷の GHQ 脇からダッジ・ウェポンキャリア (4X4) に乗せられて東横線の大倉山の西方の丘の上の (現在地形がすっかり変わって正確な位置不明) 新横浜のあたりに金属製蒲鉾兵舎があり、多数のタブレットアンテナが設置してありました。これは臨時の受信所で近く移転するとの事でした。

中に入ると、中央に 12 基の BC-779 のベイが並んでおり、片側には BC-342 のベイが 2 基設置されていました。各 BC-779 は上から時計、BC-779 本体、25Hz 対応の巨大なトランスを持つ RA-74-D 電源が一つのラックに取り付けられており、RA-74

電源の前に Teletype Model 15 テレタイプライターの置かれ、その検波信号はそのまま GHQ 内のそれぞれの部門のテレタイプに直接有線で送られます。従って受信所では時々カタカタと言うテレタイプの音がするだけで、スピーカー等の音響機器は一切装備されていないので普段は森閑と静まり返っていました。よく見るとこの建物内には SG、オシログラフ、パルボル、テスター、工具箱それにヘッドフォンが一つ用意されているのみで、電鍵も無く、私の仕事は毎週2日来て全受信機の感度チェック、チューニングチェック、RTTY の動作チェックをするというものでした。

この仕事を始めた時、通信隊の米兵がモールスを知らないことが不思議でならなかったが、ここで気が付いたことは、第2次大戦中に既に米軍の通信には一切電鍵によるモールス通信は無く、部隊間通信はテレタイプ網を用いており、小隊規模以下の移動部隊間の近距離通信はすべて無線電話によることが分かりました。当時ほとんどすべての軍用通信に電鍵によるモールス通信を用いていた我が国の場合に比べて、レーダー分野の進歩と同じく通信システムでも、はるかに進んでいたことを痛感させられました。このアルバイトは約8か月続き、電通大に入学すると、再び請われて新装なった上瀬谷受信所の GHQ セクションで25年に6か月を過ごしました。上瀬谷受信所では主な固定回線受信ベイには一面に固定同調の Collins 51N-3 が取り付けられ、テレタイプは Model 28 ASR も加えられていました。

最初の頃から、GHQ の通信将校たちが、しばしばテレタイプ信号に妨害電波の混信があってタイプ信号が乱調となり、回復に2フレーム位掛かると言っていました。そのために共産党员やパルチ

ザンの仕業ではないか等との原因の調査を命じられました。この件については、私自身も時々テレタイプの動作音が乱れ、暫く動作停止する場合がありますことに気付いており、直後に GHQ の係官から問い合わせや叱責の電話がかかってくる事がありました。固定回線受信所の受信機にはスピーカーが無く、たまたま一つしか無いテスト用のヘッドフォンをどれかの受信機に接続し、辛抱強く聞いていると、かなり頻繁に当時の周辺民家の再生検波式並四型ラジオのオーバー再生同調の時の発振音の高調波とおぼしき信号がピーと聞こえ、そのたびにこの周波数に近い受信機のテレタイプの動作音が影響されることを突き止めており、たびたび GHQ の係官を受信所に呼んできてこの音を聞かせたりしました。

この件は、進駐開始当時から全国の部隊で問題になっていたらしく、我が国の民間並4再生ラジオが原因だと分かると、GHQ では、占領直後に指令した400万台のラジオ生産は再生ラジオを生産停止とし、すべて5球スーパーヘテロダイナラジオとするよう命ずる次第となりました。この生産命令で、当時小型スーパー用ミキサ管、検波用2極3極管が無かったので、至急生産されたのが6W-C5、6Z-DH3であり、これに6D6、オーディオ出力管6Z-P1、整流管12Fを組み合わせた5球スーパーラジオが一般家庭に急速に普及することに成りました。

GHQ 関係の米軍通信施設保守のアルバイトの経験は、大戦中の日本の通信界に比較してはるかに進歩した当時のアメリカの最新技術に直接触れる機会が与えられ、その後の私の研究生活に大変貴重な経験と教訓を与えてくれたことを感謝しています。(おわり)

思い出話(高柳健二郎先生とのご縁を中心に)(その2)

青山憲太郎

NEC を退職直前に、子会社の日本電気無線電子株式会社 (NECREL) に出向しました。この会社の前身は旭電機工業製作所という会社で、UEC コミュニケーション・ミュージアムの玄関に入って右側



写真 1.
旧旭電機工業株式会社製、REB-20 型旭式救難ブイ

に展示してある ERB-20 型救難ラジオブイ (黄色塗装) を製作した会社でした。この会社は終戦当時に旧第 2 海軍技術廠の終戦処理最高責任者であった名和武 (終戦時中将) が、「払い下げ軍需品を戦後復興のために有効に利用して民政に役立てるべきである」との考えにたち、たまたま旧軍隊の払い下げ物資を扱っていた旭商事株式会社社長の牧山一昌とあいばかり、適任の旧海軍技術将校の参加を求め、無線関係機器の製造や修理を目的として設立した会社でした。島田理化や光電社も同じような経緯で設立された会社でした。

高柳先生の著書「テレビ事始」によると、東京オリンピックは昭和 15 年 9 月と決まったが、何かなんでも 3 年間で実際に放送できる装置の完成を目指して、浜松高等専門学校での経験をもとに大規模なテレビ実用化プロジェクト責任者として研究に従事し、戦局が激しくなると海軍技術電波兵器部長の名和 武のもとでレーダーの研究に従事したとの記述があり、旭電機工業製作所とは深い関係にあったわけです。

そのために、同社はNHKがテレビジョン放送

の予備免許により試験電波を発射した昭和 27 年当時から高柳先生の指導の下に開発を進め、14 型テレビ受像機の製品化に成功しました。昭和 30 年



写真 2.
旧旭電機工業株式会社製、卓上型白黒 14 インチテレビ受像機 (遠距離用)

当時、同社は、月産 10,000 台の量産ラインを構築してNECやナナオラ (七欧通信機株式会社) ブランドで 14 インチ型テレビ受像機を製造すると共に自社ブランドの“アサヒ”テレビを販売していました。有為曲折があり、この白黒テレビ製造の量産ラインは新日本電気株式会社に移管されてしまったそうです。前述の私がテレビジョン学会の”高柳賞”を受賞したときの記念パーティーで旧旭電機工業製作所製の白黒テレビジョン受像機生産の話を伺いました。

私の趣味のことを申し上げれば、中学生の頃の“ラジオ少年”が昂じて高校生でアマチュア無線の資格を取り、名古屋の電波監理局より JA20P のコールサインを取得して、現在もこの”King of Hobby”を楽しんでいます。ご承知のことと思いますが、昭和 21 年 9 月に創刊された無線雑誌の“CQ”ハム ラジオは日本アマチュア無線連盟が発行していますが、連盟の役員には次の方々の名前が見えます。

会長：八木秀次、理事長：矢本太郎、理事：石川源光、大河内正陽、佐々木正治、田母上栄、多田正信、三田義治、簗妻二三雄、森村喬、安川八郎、渡邊泰一 顧問：高柳健次郎、千葉茂太郎、難波捷吾、丹羽保次郎、溝上銑、山本勇、綱島毅 戦時中の電波科学に関する欧米との格差を経験し

た日本の頭脳とも言うべき錚々たる先生方が、再生日本の将来の電波科学の発展をアマチュア無線を趣味とする若者に託したかの感があります。

今年4月で、81歳を迎えて次第に残りの時間が気になる歳になりました。浜松に生まれて、浜松高等専門学校で研究された高柳先生がIEEEの世界のマイルストーンに認められた“高柳健次郎のテレビジョン”と、長年勤めた日本電気株式会社および日本電気無線電子株式会社での高柳先生とのご縁について、私の一人よがりの三題嚥を終わらせていただきます。(おわり)

参考文献

1. 日本アマチュア無線連盟、無線雑誌“CQ”ハムラジオ、昭和21年9月発行、科学振興社出版

トランジスタの売り込み時代(その1) 時田 元昭

昭和32年に信州大学工学部通信工学科を卒業してNECに入りましたが、配属されたところは電子管工業部というところでした。電子管、つまり真空管を作っているところです。無線事業部を希望していたので少しがっかりしましたが、6月にはさらに、その電子管工業部の中の半導体開発部というところに決まり、間もなく電子管工業部から独立して半導体事業部となりました。それはトランジスタを作るところでしたが、さらに配属先は応用技術課というところでした。トランジスタを作る技術部門ではなく、トランジスタの使用法の技術部門でした。

ソニー、当時の会社名は東京通信工業で、略称は東通工といましたが、日本で最初のトランジスタ・ラジオを発表したのが昭和30年でした。世界での最初はアメリカのRegencyという会社でしたが、それは事業としては成功せず、二番目のソニーのトランジスタ・ラジオはアメリカ、ヨーロッパで大評判となり、このあと日本中の電気機器メーカーがトランジスタ・ラジオの製造・販売・輸出で、一大フィーバーとなります。NECのトランジ

スタ事業は、ほかの日立、東芝、松下などに比べて少し出遅れました。それはNTT向けの多重電話装置用のゲルマニウム・ダイオード、マイクロ波中継装置用のシリコン・ダイオードの生産を優先したためでした。それと、NECの宿命として将来は通信・工業用、産業用にまでトランジスタを使うことになると考えていたため、技術の導入先をなかなか決めかねていたこともあります。真空管の技術の結びつきから、日立、東芝、神戸工業(現富士通テン)はアメリカのRCAから、松下はオランダのPhilipsからの技術を導入することで先行していました。そしていろいろな経緯があったのですが、NECはアメリカのGeneral Electric (GE) と提携することになりました。ソニーはトランジスタ特許の許諾をアメリカのWestern Electric (WE) から得ただけで、製造技術は独自でした。

ソニーのトランジスタ・ラジオがアメリカ、ヨーロッパで好評を博し、SONYがトランジスタ・ラジオの代名詞にまでなりました。日本中の電気機器メーカーがトランジスタ・ラジオを製造しました。ある大メーカーのトップが、そのアメリカの親会社の偉い人が来たとき、自社製のトランジスタ・ラジオを見せたところ、「ユーの会社もSONYを作っておるか」と言われたというエピソードが残っ



ています。電気に関係のない会社でも、本業の製造現場の隅にトランジスタ・ラジオの製造ラインを作って製造していました。流し台のサンウエーブ、ミシンのジューキ、風邪薬コルゲンコーワの興和化学などです。これらは本業の宣伝のためのノベルティ(景品)として使われたのでしょうか。

NEC は昭和 33 年にトランジスタ工場を建てて、トランジスタ製造に本格的に参入しました。当時のトランジスタ工場の中では顕微鏡下で組み立てる精密な作業のために、トランジスタガールとも呼ばれた熟練した女子作業者がたくさんいました。こういう根気のいる精密な作業は男性ではだめで、近くの寮から通う 2 交代制の作業でした。世の中でもトランジスタという言葉はまだ聞きなれない時代でした。トランジスタと言うとトランジスタ・



ラジオのことである場合と、それがラジオの中の部品と分かって、何か小さいもので、優秀なものらしいというだけの知識だったようです。池袋にトランジスタという名前のキャバレーができて、そこではホステスが全員小柄な女性でそろえていたという話もあります。

NEC の半導体事業部の応用技術課の仕事は、このようなトランジスタ・ラジオのメーカーの技術者に、NEC トランジスタの最適な使用法を指導することでした。NEC がラジオ用トランジスタの製造を始めて、それをラジオ・メーカーに売り込みに行くと、そこにはすでに日立、東芝などのトランジスタが使われていて、それを NEC のに切り替えさせることになります。RCA 系の東芝、日立のトランジスタは、GE 系の NEC のトランジスタに比べると少し違いがあって、そのままの置き換えではよい特性が得にくいからです。真空管のように同じ型名でソケットに差し替えてそのまま使えるのとは違って、ここに応用技術課の仕事がありました。技術力のある大メーカーはトランジスタ特性のデータを提供するだけで問題ないのですが、中

小メーカーの場合は夜残って一緒に実験するようなことも必要でした。トランジスタ・ラジオの製造をしている電気機器メーカーはもちろん、小さな下請け企業で社長室兼応接室が 4 畳半の座敷で、技術者が一人しかいないような、俗に 4 畳半メーカーにも足を運びました。当時の販売の人たちは街で〇〇電機という看板を見ただけで「ちわーっ」といって入って行ってしまふ、いわゆる飛び込みセールスまでして、そこでトランジスタ・ラジオをやっているとわかると、次は応用技術者の出番でした。そういうところでは他のメーカーのトランジスタ・ラジオを分解してそっくり真似ているだけなので、トランジスタをほかのものに替えて設計し直すことは、したことがないというようでした。

世の中の民生機器の分野では、トランジスタ・ラジオから始まって、2 バンド・ラジオ、FM ラジオ、ステレオ、テレビ、カラー・テレビ、VTR と拡大してきました。トランジスタと集積回路 (IC) の特性改善と信頼性が高まるとともに、制御機器、コンピューター、自動車電装など、産業用の分野へと、応用範囲の拡大が急速に進みました。20 世紀前半は二度の世界大戦もあってエレクトロニクスが大きく進歩しましたが、その主役のデバイスは真空管でした。今では特別な超高周波で特別な大電力に真空管が活躍はしていますが、エレクトロニクスのほとんどの分野ではトランジスタや IC の半導体デバイスです。

こうなると、NEC 製のトランジスタや IC の使用法を指導どころではなく、ユーザーの技術者に負けずに研究をして、常に最適な、新しい使用法の研究が必要になりました。それらをデータシートや応用技術資料のドキュメントとしてまとめることになります。また逆に、使用法から必要な将来のデバイスを企画して、開発・設計側に示す商品計画が重要です。それで、昔は応用技術といった部署名が、今ではソリューションという言葉が使われることが多くなりました。(おわり)

学術調査員紹介

中村 治彦



私は昭和8年3月東京渋谷の日赤病院で生まれました。両親はそれ以前から当時日本領土であった台湾の台北に住んでいましたが、初めての子供を産むため母が東京世田谷の実家に里帰りした

ので私は東京生まれになりました。父は台北帝国大学文政学部国史学教授で私たちは「昭和町」の大学官舎に住んでいましたが周りは偉い帝大の先生ばかり、学生さんたちもよく家へ遊びに来てまさに”帝大漬け”の生活でした。

小学校は台北師範附属国民学校を卒業しましたが、日本はずっと戦争をしており私たちは軍国少年として育ちました。教練の時間に手旗信号やモールス符号を習い手旗信号は完全に覚えましたが、モールス符号は後年電気通信大学であらためて習うまで実用にはなりませんでした。高校生時代短波受信に興味を覚えてモールス通信を受信しても全く解読できなかったことが電通大志望の大きな動機になりました。高校生の時ノーベル賞学者湯川秀樹博士などが参加して「民主主義科学者協会」が設立され広く若い研究者や学生の加入募集をしましたので私も入会しましたが、この組織は2〜3年で活動を停止しました。

クラブ活動の研究旅行で潮岬測候所へ高層気象観測の見学に行き、お土産にもらったラジオゾンデを長年月大切に保存していたものが今 UEC コミュニケーションミュージアムに展示されています。当時はまだアマチュア無線も解禁されておらずJARL（日本アマチュア無線連盟）が短波受信愛好家向けにSWL（Short Wave Listener）登録ナンバーを発行していましたので私も申請してJA3-1006 というナンバーをもらいました。昭和

31年電通大を卒業、大手海運会社の大阪商船（現商船三井）に入社しましたが第1級無線通信士の資格があれば船舶通信士として世界中を見て回れるチャンスがありました。日本のレーダー研究は軍事科学と言うことで終戦後はGHQにより禁止されていましたが私が乗船した頃から船舶に装備されるようになりました。日本にはレーダーの参考書もまだほとんどなく、装置も当初はアメリカからの輸入品がほとんどで、私たちは英語のマニュアルを訳しながら一生懸命OJTでレーダーの勉強をしました。昭和40年代になると大型汎用コンピュータが実用化され民間企業でも競って導入を始めました。レーダーの時と同様、コンピュータについても日本語の実用参考書はまだなく、私は会社からIBM社に派遣されて半年間コンピュータの基礎を学び、アセンブラー言語でプログラムを書きましたがこの教育がその後、通信のデジタル化を理解するうえで大いに役立ちました。昭和62年、30数年勤務した商船三井を選択定年退職、縁があって三菱電機に勤務することになりました。

私は三菱電機が製作する有線、無線各種大型通信機器で現地据付プラント工事が必要なものの納入施工管理の仕事をしましたが、この業務は建設業法の適用を受ける仕事で、電気工事1級施工管理技士、公共工事監理技術者資格が必要でした。私はこの資格取得のほか、新しいデジタル通信時代の勉強ついでに第1級無線技術士、第1種電気通信主任技術者、デジタル1種、アナログ1種工事担任者、第1級有線テレビジョン放送技術者、第1種電気工事士、家電製品総合エンジニア資格など電気通信フィールド業務に必要なすべての資格を取得しました。平成14年、15年間勤務した三菱電機を70歳で勇退しました。そして電気通信大学80年誌に資料を提供したことが縁で、私の所

有する古い無線機類のうち学術的価値のあるものを歴史資料館に寄贈することになり、当時の館長、初代館長、現役の先生や技官の方々がはるばる神戸の私宅までお出でになり、ご縁が続いています。(おわり)

磯田 英弘



1967年2月1日新宿生れ都立府中農業高校卒。私が生まれた年には実家の傍にヨドバシカメラが出来たそうです。その当時、私の父は烏山に小さな工場を持っており、電気製品の組立をやっていましたが、貧しかったこともあり、小学生の頃から電線剥き、半田付け、ケースの組み立てなどを毎日手伝っていた為、製作技術は向上しましたが、そのため電気関係のことは永いこと嫌いでした。

ただ、工作機械や測定機器は自由に使える環境がありましたので、それだけは無駄に恵まれていました。高校卒業後、和菓子工場、船舶整備工として働いたのち1991年に渡米、貿易会社、大工、植木屋、レストランを経て航空機リース会社にて整備士及び操縦士として8年勤務ののち2007年に帰国。東京都の生活自立支援施設にて職員として働いたのち現在は都内の病院勤務。

在米時にはフリーマーケット等にはまり、古い電気製品を集め始めたのをきっかけに、ポータブルの真空管ラジオ、1970年以前のトランジスタラジオを収集。また現在は機械式懐中時計の修理も趣味+実益としてやっています。時計に関しましては、昔集めた古い時計を修理しようと時計屋さんに見せ回すも、現在は古い時計を修理できる人がほとんど居なくなってしまっていることを知り、仕方なく自分で修理している所、たまたま修理職人の方に出会い、師事。そのため最近は電子機器

より時計を修理する方が多くなりました。UEC コミュニケーションミュージアムに参加となるきっかけは、ラジオ収集と共に集まり始めた真空管のうち、面白い形状をした球のみを集めホームページ上に公開していた所、横調査員の目に触れ、それ以来のお付き合いとなっております。(おわり)

編集後記

□当館が「歴史資料館」としてスタートしてから16年、当時の学長として重要な役割を果たされた有山さんに創設時の思い出をご執筆いただきました。

□終戦直後のラジオ製造業界に対してそれまで生産の中心だったいわゆる「並四ラジオ」の生産を停止、スーパーヘテロダインラジオを作れという指令が出された原因について、当時の米軍の情報通信現場を体験されていた芳野さんにご執筆いただきました。日本の無線史・産業史での重要な証言を記録できたと思います。

同時に、太平洋戦史で日本の敗戦の原因にレーダーの技術格差が語られることが多いのですが、電信通信における格差もそれに劣らず重要な要因であったと感ずる次第です。

□次号(第8号)は1月末を予定しています。

皆様のご投稿を12月末までにお寄せ下さい。

原稿は、E-メールの場合は

gmiyairi@triton.ocn.ne.jp までお送り下さい。

手書きまたはワープロ印字したものを事務局に届けていただいても結構です。(宮入源太郎)

ミュージアムニュース 第7号

発行年月日 2014年10月31日

発行者 国立大学法人 電気通信大学

UEC コミュニケーションミュージアム
館長 由良 憲二

発行所 UEC コミュニケーションミュージアム

TEL 042-443-5296

FAX 042-443-5798

E-Mail info@museum.uec.ac.jp